

---

# 虎と子猫掌編集

羽取

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虎と子猫掌編集

### 【Nコード】

N8152Q

### 【作者名】

羽取

### 【あらすじ】

「虎と子猫」の活動報告に掲載した小話に加筆修正したものを置いています。本編に入りきれなかった話です。続編の前にこっちを作ってどうするんだ私……。

## 不憫な副官の話（前書き）

「虎と子猫」のお気に入り件数が100件超えました。感謝です！

## 不憫な副官の話

忙しすぎる。

これも全ていきなり休暇を取ったヴァレンディアのせいだ。奴のしわ寄せが全て俺にきている。やはり、奴を城から出すべきではなかったのだ。

幾ら、相手が隣国で五本の指に入る魔術師といっても、俺でも多分何とかなっただろう。「多分では駄目だ。確実になければ」と議長には言われそうだが、全てのことには確実などない。あのヴァレンディアでさえ、俺たちの予測不可能な行動を取ったのだから。

魔術師の骸を城に送りつけ、失敗した魔法陣を消したとだけ報告して、本人は戻らないとは前代未聞だ。

魔術師長であり、王の片腕であるヴァレンディアがまさか。

信じられなかった。しかし、事実には違いない。骸も連絡も全て受けたのは俺だ。

奴に何があったんだ？

もう駄目だ。これ以上待ってられるか。再三の要請も無視しやがって！ いくら今は以前より戦が減ったといっても、結んだのはまだ休戦協定だけだ。いつそれも破られるかわからない。獣の国ディアルーディンはまだしも、人の国パラルレムには不審な行動も多い。数ヶ月前の魔術師の侵入もそうだ。

これ以上は俺が城の結界を支えるのも限界だ。力云々より、精神的な負担が多い。

城内にある執務室に強制送還の為の魔法陣を描き、準備を整える。今考えても、これが間違いだったのかどうかは判らない。

衝撃だった。ヴァレンディアが子猫を抑えつけて襲っている。現在のヴァレンディアは見かけは虎だが、獣人といって本性はどちらかと言うと人だ。だから、普通、そういうことをする時は人の姿になる。しかし、相手は猫だ。いや、獣人かもしれないが稀にいる自らで変化を制御できない者だとしても、それは子供に限る。

いつからそんな趣味になった！

なんとか制止の言葉を捻り出し子猫から引き離そうとするが、歯牙にもかけない。完璧に無視されている。うわああ舐めるな！と泣きそうになった時、天の助けがきた。なんと、ヴァレンディアは子猫の言うことを素直に聴いたのだ。多少名残惜しそうだったが。

「いつからそんな幼女趣味になったんだ！？ しかも、獣形ってお前……」

『別に構わないだろう。彼女以外に興味はないし、愛があれば体格差など……』

「構うだろっ！」

ヴァレンディアはいつの間にか常識というものが通じなくなっただ。

説得は諦めて、強制送還の魔法陣を使い城へ帰ろうとしたが、ヴァレンディアからの妨害に遭い、着いたのは奴の屋敷。しかも、待ち受けていたのはヴァレンディアからのお叱り。いやいやいや、何故俺が。あっさり乗ったのも妨害したのもお前だろうが！

そして、魔術の影響を受けて人形ひとがたに戻った少女に対する変態つぶりを見せつけられた。お嬢ちゃんどん引きしてるからそこまでしておけと言いたいが、俺も死にたくない。現に今も危ない状況で人に構う余裕などない。

何とか頑張ってくれ！

## 不憫な副官の話（後書き）

乱入者もとい、ヴァレンディアの副官視点でした。

だいぶ修正しました。この後の小話2と続編を思いの儘に書いてしまい矛盾やらなんやらがひどかった。今もひどいかもかもしれませんが。

ここまで読んでくださりありがとうございました！

## 混乱する女性医師の話

『済まないが、手の空いてる者がいればヴァレンディアの家にきてくれ。見てほしい子がいるんだが……』

『女性で。男には見せたくないの』

『だそうだ……』

という連絡が休暇という名の失踪中だったヴァレンディアの屋敷からきたのは少し前。手の空いている者、というか女が私しかいなかったので向かうことになった。

あの口振りからすると、どうやら患者は女性のようだ。ヴァレンディアが怪我をすることなどまず有り得ない。

「……どなたですか」

「僕の妻だが」

「そんなふざけたことを訊いてるんじゃないわよ！ どこでこんな女の子拾ってきたのよ貴方は！ まさか誘拐？ そうに違いないわね。全く普段ぼさつとした男が一旦キレると何するか解ったものじゃないわ！ イーガルもどうして止めないの！」

部屋の隅で立ち尽くしている、ヴァレンディアを迎えに行ったはずの男を睨みつける。全く、役に立たない！

「いや、止めるどころじゃなかったというか、俺も城に連れていくつもりだったのに、無理やり軌道変更されたんだぞ……被害者だ」



確かに疲労困憊といった風ではあるが同情の余地はない。上司の手綱を取れなくてどうするのよ！

「はいはいはい。とりあえず容態を見ますから男共はとつとと出て行つて下さい」

しっしつと追い出す。ヴァレンディアは「どうせもう全て見たので此処にいる」と馬鹿なことをほざいたが追い出した。あれはいつの間に変態になった。

男共を部屋から放り出し、ベッドに横たわる少女に向き直った。

「さて、この子とは　ヴァレンディアが割り込んだときの魔力に当てられたって感じかしら。イーガルの陣がヴァレンディアの力を抑えられるわけなのに、バカねえ。こんな女の子にはっかかり負担かけて」

そつと額に掛かった黒髪を撫でてから、少しでも楽になるように癒やしの力を流し込む。他に外傷などはないか確かめようとシーツを捲つて驚いた。少女は服を着ていなかった。獣形から人形ひとがたに戻つたとは聞いていない！

シーツを肩まで掛け、部屋の外に出る。

「貴方達！　私があの子の服を持ってくるまで指一本も触れるんじゃないわよ！　解つた!？」

突っ立っている二人に言い聞かせてから、走った。

裸のままにしておくなんて、信じられない！　ああ、早く帰つてこなくちゃ！

あの子が変態に何かされる前にっ！

その時の私はヴァレンディアの屋敷にも何かしら服はあるとか、  
奴に取ってこさせるのが一番安心だということをしつかり失念して  
いた。

## 混乱する女性医師の話（後書き）

そして本編の最後に続いています。

シート捲ってヴァレンディアが何をしていたのか恐ろしいです。イ  
ーガルは勿論その間動けません。

続編執筆中です。もしかすると2月中に公開できるかもしれません。  
その時に改名します。詳しいことは2/10の活動報告にあります。

ここまで読んでくださりありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8152q/>

---

虎と子猫掌編集

2011年2月14日22時04分発行